08. 3. 21
村川淳一

日本陸軍航空史（その 13）
～開戦劈頭の快進撃～

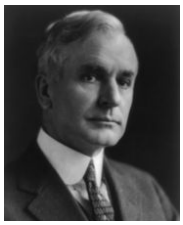
1 はじめに

前号で落下傘メーカーを『藤倉工業㈱』（昭和 14 年創立）と書きましたが、藤倉化成㈱（昭和 13 年創立）に勤務している高校の同期生 Y 君から、正確には『藤倉航空工業㈱』だと教えてもらいました。訂正させていただきます。この会社は、昭和 34 年からお馴染みの『藤倉航装㈱』という商号になっています。当時、藤倉化成㈱は風防ガラス（アクリル樹脂製）、両社の親会社の藤倉ゴム工業㈱は航空機用タイヤを製造していたそうです。

今回は、大東亜戦争開戦準備と、昭和 16 年（1941 年）12 月 8 日から 10 日頃までの、主としてマレー及び比島作戦における快進撃の模様について述べます。

2 開戦に至る経緯

(1) ハルノート[1)]


Cordell Hull
（インターネットから）

昭和 16 年 10 月 17 日に近衛内閣が総辞職し、翌日に東條内閣が成立しました。そして、11 月 26 日にいわゆるハルノート(Outline of Proposed Basis for Agreement Between The United States and Japan) が通告され、日本軍の支那・仏印からの全面撤退、汪兆銘政権の否認、満洲国の否認、日獨伊三国同盟の否認などが示されました。これは、日露戦争以後のわが国の権益をすべて放棄せよというもので、到底飲めるものではありませんでした。

ハルの暫定案には満洲国の承認がありましたが、ソ連のスパイであった、ハリー・ホワイト財務省次官補が作成した案をルーズベルトが採用し、これがなくなったようです。参考文献 2 には「アメリカは白人植民帝国主義の歴史で、最後に登場した国だ。アメリカがアジア大陸にその侵略の矛先を向けた頃には、英仏などの白人先進国にほとんど占領されて、残っていたのは満洲だけだった。ここに無理に割り込もうとすれば、先発の日本と衝突するのは目に見えていた。（中略）アメリカは日本を満洲から追い出し、利権を独り占めしようと企み、次から次へと日本叩き政策を採って、日本を挑発し続けた」とあります。

政府、大本営はこれを対日最後通牒であると判断し、12 月 1 日の御前会議で次の決定を行いました。

対米英蘭開戦ノ件
十一月五日決定ノ「帝國国策遂行要領」ニ基ク対米交渉ハ遂ニ成立スルニ至ラス帝國ハ米英蘭ニ対シ開戦ス

(2) 宣戦詔書草案の修正[3)]

12 月 7 日に宣戦詔書草案を最終的に確定しますが、それまでの東條内閣による数回の内奏の機会に、聖旨を体して二箇所の修正が行われました。東條英機宣誓供述書[3)]によりますと、その一つは「今ヤ不幸ニシテ米英両国ト戦端ヲ開クニ至ル洵（まこと）ニ已ムヲ得サルモノアリ豈（あに）朕カ志ナラムヤ」の表明であり、もう一つは、末尾の「皇道ノ大義ヲ中外ニ宣揚セムコトヲ期ス」を「帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス」と改められたものです。

これが陛下のお考えであり、やむを得ず開戦しなければならなかった御苦悩が、お言葉ににじみ出ています。

(3) 大本営の進攻命令[1)]

御前会議決定直後、陸海軍統帥部長は作戦実施の発令を上奏しました。それは、すでに決裁されている**帝國陸海軍作戦計画**に基づく、**南方軍総司令官**、**南海支隊長**、**支那派遣軍総司令官**、**聯合艦隊司令長官**、**内戦部隊指揮官**に対する作戦発動の命令でした。

作戦開始日は、月齢 20 日前後、米国艦隊の真珠湾在泊の可能性が高い日曜日の 12 月 8 日と決定されました。かくして、12 月 2 日 14:00、大本営陸軍部は、南方軍総司令官等に対し、**大陸命第五百六十九号(鷲)**等の発令とX 日(ヒノデ)は 8 日(ヤマガタ)とする電報命令を発しました。

3 南方航空統帥組織[1)]

南方に推進される陸軍航空部隊は、**第 3 飛行集団(集団長・菅原道大**(すがわらみちお)**中将**:21 期)が **48 個中隊**、**第 5 飛行集団(集団長・小畑英良**(おばたひでよし)**中将**:23 期)が 20 個中隊、**南方軍直轄飛行部隊 14 個中隊**、**合計 82 個中隊**であり、教育部隊を除く**全 144 個中隊**の 57%に当たる戦力でした。

菅原第 3 飛行集団長
(インターネットから)

これを指揮するためには、航空兵団司令部を設けることが望ましかったのですが、陸軍中央部は、新設に必要な高級指揮官・幕僚が足りないとして、これを見送りました。**満洲**の**航空兵団司令部**は、対ソの関係で動かせませんでした。

代わりに南方軍総司令部に航空の総参謀副長を置き、参謀部の第 1 課(作戦)、第 2 課(情報)及び第 3 課(後方)から航空関係業務を抽出して第 4 課(航空)を新設しました。これにより、南方軍の航空統帥組織はやや独立した形になりました。括弧内は陸士の期別です。

小畑第 5 飛行集団長
(インターネットから)

総司令官	陸軍大将	寺内 壽一(11)
総参謀長	陸軍中将	塚田 攻(19)
総参謀副長	〃	青木 重誠(25)
総参謀副長(航空)	〃	坂口 芳太郎(25)
第 1 課(一般作戦)	陸軍大佐	石井 正美(30)
第 2 課(一般情報)	〃	小畑 信良(30)
第 3 課(一般後方)	〃	石井 秋穂(34)
第 4 課(航空)	〃	谷川 一男(33):全般統制

陸軍中佐 齋藤 朋雄(34):兵站、通信、気象／陸軍中佐 鈴木 京(35):情報、政策、資源
陸軍少佐 松前 未曾雄(38):作戦 ／陸軍少佐 澁谷 正成(45):編制、航空輸送等

上記のほかに、総司令部には**航空兵器部**(部長:**牧野演少将**(23 期))が設けられました。

菅原中将は歩兵出身で、昭和 19 年(1944 年)12 月 26 日に**第 6 航空軍司令官**として着任後、沖縄特攻を指揮しましたが、最後の特攻機同乗の誘いを断り、のちには自決を求められますがそれも断わり、天寿をまっとうされます。また、**小畑中将**は騎兵出身で、昭和 19 年 2 月に地上軍の**第 31 軍司令官**に任ぜられ、同年 8 月、**グァム島**で壮烈な戦死をされます。

4 南部仏印への航空基盤の設定[1)]

(1) 概 要

11 月中旬における航空基盤は、かなり不十分でしたので、**第 3 飛行集団**は、**第 25 軍**に対し、その修正補備を要求しましたが、もともと技術や機械力のない陸軍では無理でした。特に、レーダーの未装備と土工器材の不足は、致命的でした。航空基盤の整備が進んでいなかったことで、第 3 飛行集団は相当の計画変更を余儀なくされ、同集団は第 25 軍に対して不信感を抱いたようです。

(2) 通　信

第 25 航空通信隊により、主要基地間の無線連絡系ができていました。また、 **第 15 航空通信隊**主力がマレーに進出する予定でした。

(3) 航空情報

航空情報隊は、敵機の接近を探知する任務だったようですが、まだ我が国にはレーダーがなく、各飛行場に対空監視哨を配置した程度でした。レーダーについては、フィリピン進攻時に米軍のものを発見し、それをまねて作り、部隊配備になったのは昭和 18 年で、参考文献 4 によると同年中期頃には精度がかなり向上していたようです。南方には**第 1 航空情報隊**が配置されました。

(4) 気　象

南支那気象隊がハノイ、海南島地区まで、**野戦気象第 1 大隊**が中・南部仏印を担任し、各飛行場に観測所を置いて一応の態勢を整えましたが、焦点の 11 月下旬から 12 月初旬の飛行部隊の集中展開時に気象部隊があまり活用されず、多くの事故機を生じました。

(5) 航　測

航測隊は、陸軍飛行部隊の飛行監視と誘導網の創設を目的に設けられました。**第 17 航測隊**が南支方面から仏印への空輸、フコク島からマレー半島方面への船団掩護等協力に重点を置いて配置され、各主要基地に展開しましたが、飛行部隊の装備（無線機はよく故障しました）や訓練の未完で、十分な成果が得られませんでした。

航測隊は、『地 1 号方向探知機』という応急的な器材で、味方機の飛行方向を探知し、無線機で飛行方向の指示を行いましたが、方向探知機は実用性に乏しく、実際に航空路上に人員を配置して、対空無線機で誘導する方法が主体でした。

(6) 航空補給修理

航空補給修理の拠点はサイゴンとし、ハノイ、プノンペンに**移動修理班**が出されました。また、**第 17・第 18 船舶航空廠**がサイゴン付近に進出しました。

(7) 航空燃料・弾薬

作戦に絶対不可欠な 1 式戦隼用の砲弾と落下タンクが、11 月中旬になって初めて到着していないことが判明しました。誤って大連に輸送されており、緊急空輸により、開戦の前々日にようやく必要最小限の補給ができました。

5　第 3 飛行集団展開準備の蹉跌[1)]

第 3 飛行集団長・菅原中将は、12 月 2 日 11:00 に、独断で「明 3 日から作戦展開を開始し、5 日夕刻までにこれを終わるように」という命令を出しています。これは大本営が 12 月 2 日 14:00 に開戦を 8 日とする命令を出す前であり、天候判断もあったのでしょうが、早期に部隊を動かしたことは疑問です。この展開行動においては、海上航法能力の未熟と天候の不良が相俟って、多くの犠牲者を生みました。

片や**第 5 飛行集団**は、日本の領土たる南台湾に展開するだけでしたので、これは安全でした。

(1) 第 7 飛行団

廣東に在った**第 7 飛行団長・山本健兒少将**は、戦隊ごとに前進を命じ、自らは 12 月 3 日に廣東を離陸し、同日午後にはプノンペンに到着しました。

飛行第 12 戦隊（97 重爆）は、3 日の天候が不良であるという**南支気象隊**の判断に基づき、各中隊 3 機の優秀者で編隊を組んでプノンペンに推進しました。そして、主力は 5 日前進と命じました。しかし、5 日の天候も依然として悪く、6 日までに **12 機が行方不明**となりました。同戦隊の定数は 27 機で、予備機が 9 機あったとして合計 36 機ですが、その 1/3 と貴重な搭乗員（1 機 7 名）を失ってしまったのです。**飛行第 60 戦隊**（97 重爆）と**飛行第 98 戦隊**（97 重爆）も、1 機ずつ失いました。

しかし、第 7 飛行団唯一の戦闘機部隊である**飛行第 64 戦隊**(隼)は、**加藤建夫**(かとうたてお)**中佐**の陣頭指揮のもと、廣東からゾンド(ズオンド)までの 1,750km を直路、高度 4,000m の雲上飛行を行い、35 機中 1 機も失わずに、フコク島ゾンドに集中を完了しました。戦闘機部隊として類例のない見事な行動でした。『**加藤隼戦闘隊**』については、次号で特集させていただきます。

加藤中佐は、自らフコク島への事前偵察飛行を実施しており、また、廣東において戦隊員に対する猛烈な洋上航法訓練を実施していました。

(2) 第 3 飛行団

ハノイに在った**第 3 飛行団長・遠藤三郎少将**は、12 月 3 日朝、隷下部隊に南部仏印のコンポントラッシュ前進を命じ、自らは 4 日、海岸線沿いに低空飛行で前進しました。同様な飛行を行った**飛行第 59 戦隊**(隼)は、1 機の犠牲で進出を完了しました。

飛行第 75 戦隊(99 双軽・4 人乗)は主力が三亜に不時着し、5 日には**戦隊長・亀山計衛中佐**機が行方不明になりました。また、廣東から南部仏印のコンポンクーナンに進出を企図した**飛行第 27 戦隊**(99 襲撃)は、主力をもって 5 日に出発、三亜を経てコンポンクーナンに向いましたが、仏印東岸付近の密雲に阻まれ、**戦隊長・櫻井肇中佐**機を含む 8 機を失いました。

また、ハイフォンからタニに向った**飛行第 90 戦隊**(99 双軽)は、30 機全機が進出できましたが、タニ飛行場は 4 日の雷雨で使用困難となり、5 日にはコンポントラッシュに移りました。

(3) 第 10 飛行団

台北に在った**第 10 飛行団長・廣田豊少将**は、12 月 1 日にツーランに前進し、同地で集団命令を受け、4 日、クラコールに進出しました。**飛行第 77 戦隊**(97 戦)主力は、6 日、ゾンドに進出しました。また、**飛行第 31 戦隊**(97 単軽)は、無事 4 日、シェムレアに進出しました。さらに、九州からは**飛行第 62 戦隊**(97 重爆)が 6 日、無事クラコールに進出しました。

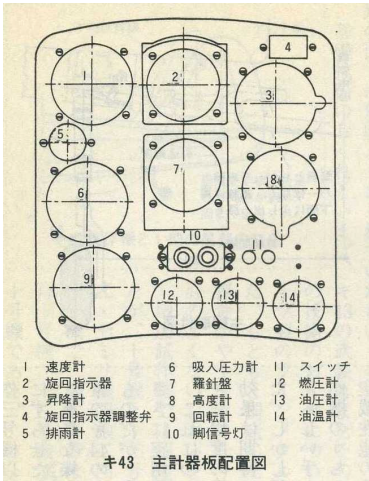
(4) 第 3 飛行集団機の損耗結果

第 3 飛行集団機の損耗は、結局、第 1 次集中時が 6 機(うち気象によるもの 3 機)、第 2 次集中及び展開時が 32 機(うち気象によるもの 25 機)であり、合計 38 機(うち気象によるもの 28 機)の多数に上りました。その主な原因として、計器装備の未整備、計器飛行能力の未熟、局地気象の把握不十分、飛行部隊と気象部隊の連携不十分などが上げられます。陸軍気象部には、天候偵察専用機があったのですが、なぜか使用されませんでした。

6 戦闘機と重爆の計器装備

ふだん、陸地を見ながら飛ぶ陸軍操縦士にとって、目標物のない海上や雲上を飛ぶのは至難の業でした。また、当時の戦闘機の計器は簡単なもので、羅針儀(盤)だけが頼りですが、偏流で機体が流され、それを修正しながら目標に向って飛ぶというのは大変なことでした。

隼初期型の計器盤→
(インターネットから)



隼初期型計器盤(左)の説明[5)]

それに比して、重爆の計器は非常に充実していました。その細部は承知していませんが、とりあえずインターネットにより、**97 式重爆Ⅱ型**の計器盤を紹介します。

97 式重爆Ⅱ型の計器盤
（インターネットから）

羅針儀（98 式乙）、自動操縦装置（95 式）、航路指示器、旋回計（98 式）、速度計（98 式）、高度計（97 式）、昇降計（95 式 2 型）、時計、回転計（98 式）、同調計、吸入圧力計（98 式）、シリンダー温度計、排気ガス計（2 型）、油温計（89 式）、油圧計、燃料計、燃料圧力計（1 式）

注：型式の付記のないものは、不明のもの。

7 マレー及び比島正面の敵勢力と我の進攻要領の違い[1)]

(1) マレー方面の敵勢力

英極東軍総司令官はブルック・ポッパム大将でした。

ア 英陸軍

マレー軍司令官パーシバル中将指揮の 31 個大隊（8～9 万人）であり、英軍は「開戦に当たってはタイに進出し、シンゴラ方面飛行場を占領する」という『マタドール計画』がありました。

プリンス・オブ・ウェールズ
（インターネットから）

イ 英極東海軍

フィリップス中将指揮の戦艦 3 隻（プリンス・オブ・ウェールズ、レパルス、その他）、重巡 1 隻及び駆逐艦 8 隻でした。

ウ 英空軍

プルフォード中将が指揮官でしたが、スピットファイアーやハリケーンは未到着であり、増強は著しく遅れていました。開戦時、基地は各所に分散していました。英空軍の機種・機数はおおむね次のとおりでした。参考文献 6 によりますと、ほかにオーストラリア空軍 5 個中隊、ニュージーランド空軍 1 個中隊が所在し、合計 13 個中隊 362 機で、うち 233 機がすぐに使用可能だったそうです。1 個中隊は 12～20 機です。

マレー方面の英空軍機[1)]

No.	機　　種	機 数
1	ブレンハイム Ⅰ（双発軽爆）	19
2	ブレンハイム Ⅰ（双発夜間戦闘）	12
3	ブレンハイムⅣ（双発軽爆）	16
4	ビューフォート （双発軽爆）	24
5	ハドソンⅡ （米製　双発重爆）	24
6	バッファロー（米製　戦闘）	60
7	カタリナ（米製　双発飛行艇）	3
合　　計		158

Brewster Buffalo　F2A－2
（インターネットから）

Catalina 飛行艇
（インターネットから）

エ　彼我の機数比較

英空軍だけを比較すると右表のように、我の機数が 3.8 倍と圧倒的に勝っており、他国の空軍を加えますと 2.6 倍になります。

彼我の機数比較[1)]　　（単位：機）

	日本軍			英空軍
	陸軍	海軍	計	
戦闘	176	37	213	72
軽爆	102	0	102	59
重爆	124	99	223	27
偵察等	55	6	61	0
合計	457	142	599	158

(2) 比島方面の敵勢力

米極東軍総司令官は**マッカーサー中将**でした。

ア　米比陸軍：米軍約 3 万人、比軍約 8 万人、合計約 11 万人。

イ　米比海軍

ハート司令長官が指揮する、重巡 1 隻、軽巡 2 隻、駆逐艦 13 隻、潜水艦 29 隻、魚雷艇 6 隻、PBY（哨戒・爆撃）機 32 機、水上機母艦 4 隻などでした。

Seversky　P－35
（インターネットから）

ウ　米極東航空軍

参考文献によりかなり差がありますが、主としてインターネット・フリー百科事典『ウィキペディア』の『フィリピンの戦い』によりますと、**ブレリトン少将**指揮下、P-35 戦闘機 52 機、P-40 戦闘機 76 機、B-17 重爆撃機 35 機、B-18 双発爆撃機 18 機、A-27 攻撃機 9 機、参考文献 6 によりますと、P-40 の未整備機がさらに 31 機、フィリピン空軍の P-26 戦闘機が 16 機、B-10 双発爆撃機が 12 機あり、さらに米軍は観測機 O-46 と O-52 を合計で 18 機持っていたとあります。

Curtiss　P－40
（インターネットから）

エ　彼我の機数比較

以上を総合すると、未整備機を除き、海軍の PBY（哨戒・爆撃）機 32 機を加えると機数の比較はだいたい右のようになり、我が、1.3 倍ということになります。

彼我の機数比較　　（単位：機）

	日本軍			米比軍
	陸軍	海軍	計	
戦闘	72	126	198	144
軽爆	54	12	66	30
重爆	18	144	162	35
偵察等	41	74	115	59
合計	185	356	541	268

(3) 進攻要領の違い

マレーと比島の上陸作戦には、制空権と制海権の獲得が必要でしたが、その条件にはかなり差がありました。比島方面の米軍航空基地は、おおむねクラーク基地及びマニラ基地地区に集約されており、その距離は台湾南部から 800～900km で、零戦の戦闘行動半径を約 1,000km に延伸したことから、同地区の攻撃が可能となっていました。

マレー方面は陸軍の担当でしたが、同方面の英空軍基地は、半島のあらゆる地域に分散されており、南部仏印からの距離は、北部のアロルスターが約 600km、南部のシンガポールが約 1,100km ですので、97 重爆と 1 式戦の戦爆連合攻撃は、北部までしか実施できない状況でした。当然、比島攻略に先立つマレー作戦に空母を使用することはできず、開戦劈頭に英空軍戦力を撃滅することなど不可能でした。したがって、比島方面については正攻法である、航空撃滅戦によって制空権を確保したのちに第 14 軍主力を上陸させることとしました。ただし、バシー海峡地区における小部隊の奇襲上陸については、航空攻撃を行わずに奇襲上陸することとしました。

8 マレー上陸作戦[1)]

(1) 英軍哨戒機の撃墜

昭和16年12月4日早朝、**山下中将**指揮の**第25軍**を乗せた約60隻の船団は三亜を出港し、南下を続けました。この時点の情報では、英軍は地上兵力約 6 千名、戦艦プリンス・オブ・ウェールズ及び戦闘機数個中隊の増強が伝えられていました。

さて、12月6日 12:00頃、カモー岬南東点(下図のD点)を、予定よりも3時間早く通過した時点で、コタバルから発進したオーストラリア軍のロッキード・ハドソン爆撃機に発見され、シンガポールに打電されます。そこで、船団は直ちに右に舵を切ってタイ国行きを偽装しました。

ロッキード・ハドソン爆撃機

(インターネットから)

12月7日のシャム湾は層積雲(むら雲)が海上200mまで垂れ下がり、時々降雨がありました。この状況下で、船団掩護の**第12飛行団・飛行第1戦隊**(97戦)の**窪谷敏郎中尉**が、パンジャン島北西 40km 地点において、10:25頃カタリナ飛行艇に発見され射撃されましたので、同中尉はこれを撃墜しました。当然、この地点ではあらかじめ、射撃されなくても撃墜することになっていました。カタリナ飛行艇は英軍司令部に連絡することなく、海中に没しました。

(2) コタバル上陸

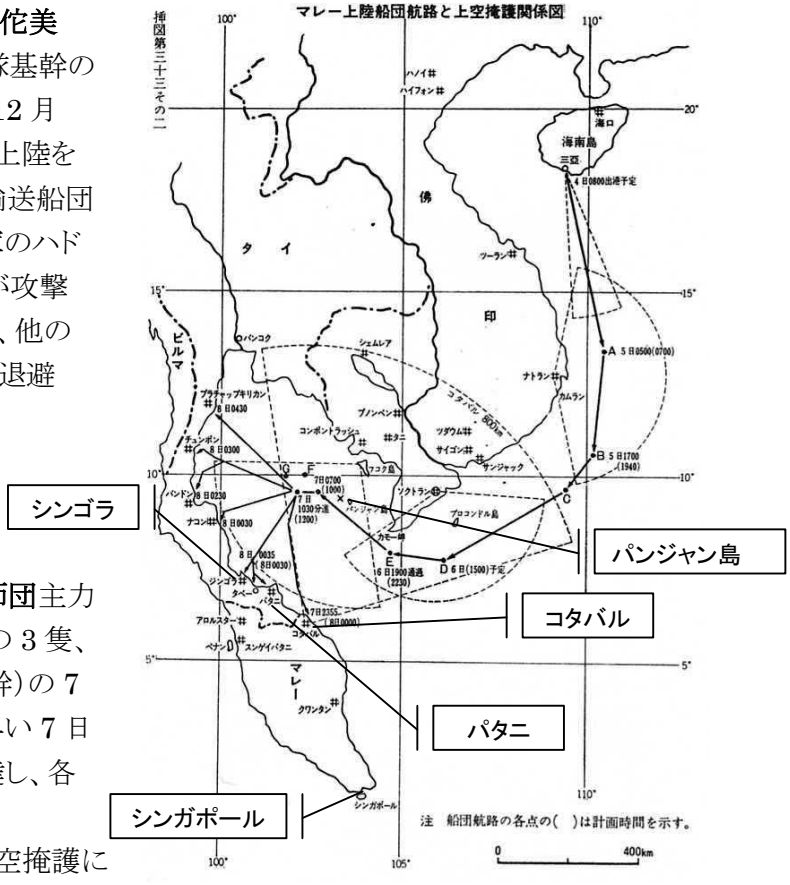
最初の陸海軍協定では、ハワイ空襲が12月8日黎明(ハワイ時間 04:30、日本時間 00:00)とされ、その他の正面の攻撃は、これ以降とされていましたが、11 月下旬に至って、ハワイ空襲時刻は、飛行部隊の練度の問題から払暁に変更されました。しかし、他方面への攻勢は詳細に具体化されていて、その変更が困難ということで、そのままにされました。

第18師団の**歩兵第23旅団長・佗美**(たくみ)**浩少将**が指揮する1個聯隊基幹の**佗美支隊**は3隻の船舶に分乗し、12月8日 02:15コタバル海岸に達し、上陸を開始しました。しかし、すでに我が輸送船団は01:00に発見されており、英空軍のハドソン機、ビューフォート機で輸送船が攻撃されました。その結果1隻が沈没し、他の2隻は06:00パタニ沖方面に一時退避しましたが、払暁までにはなんとか橋頭堡を確保しました。

(3) シンゴラ上陸

第25軍の先遣兵団たる**第5師団**主力基幹は17隻に分乗して佗美支隊の3隻、**宇野支隊**(第55師団第3大隊基幹)の7隻とともに、予定より1時間30分早い7日10:30に分進点G(右図参照)に達し、各上陸点に向かいました。

第12飛行団は全力で船団の上空掩護に当たりましたが、反撃はありませんでした。



マレー上陸船団航路と上空掩護関係図[1)]

次いで、7 日日没から 20:00 まで任務に就いた**飛行第 64 戦隊長・加藤建夫中佐**は、暗夜・悪天候の中、率先して掩護任務を達成しましたが、フコク島への帰途、懸命に志願して任務に加わった高橋中尉が指揮する編隊の 3 機を失ってしまいました。

いっぽう、加藤部隊のフコク島帰還誘導を命ぜられた同団**飛行第 98 戦隊**の**大西豊吉少佐編隊**の 97 重 3 機はスコールと悪天候のために船団を発見できず、フコク島付近で 1 機を失いました。

8 日未明、シンゴラ方面の海上は、風速 7m、波高 2m の荒天でしたが、予定より約 1 時間遅れて、04:12 に上陸を開始し、タイ軍の抵抗もなく、まもなく飛行場を占領しました。

8 日払暁から 11:00 までは零戦が泊地の掩護に当たり、それ以後は**第 12 飛行団**(97 戦×2 個戦隊)がその任務を遂行することになりました。虎の子の隼部隊である**飛行第 59 戦隊**と**飛行第 64 戦隊**はマレー進攻任務に振り向けられました。

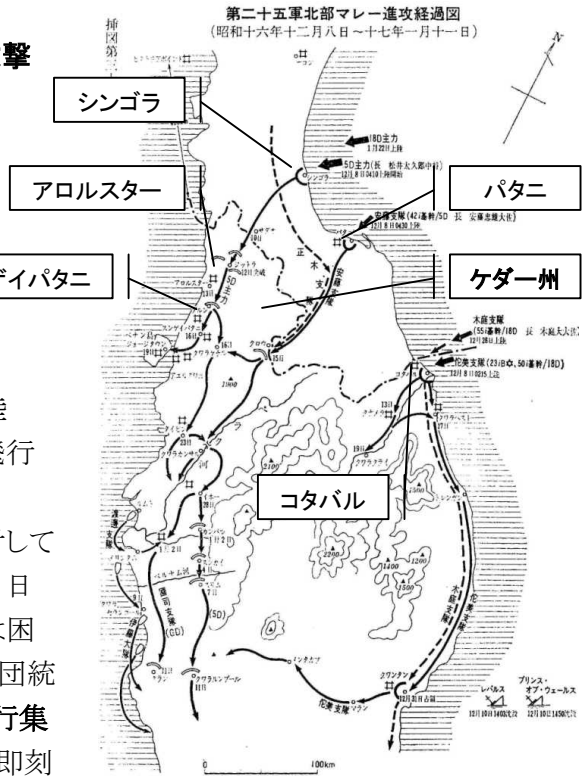
97 戦が泊地掩護をするためには、シンゴラに躍進しなければ、その足の短さから任務を達成できません。しかし、シンゴラからは飛行場の使用の可否についての連絡が来ません。**飛行団長・青木武三少将**は率先指揮し、仏印帰投のための燃料を使い切るよう命じて、8 日 10:30 頃、先頭を切って占領直後のシンゴラ飛行場に強行着陸し、次いで第 1 戦隊をシンゴラ、第 11 戦隊を同じく占領直後のパタニの飛行場に強行着陸させました。

(4) シンガポール、ケダー州方面の飛行場攻撃

マレー方面航空攻撃の陸海軍協定では、陸軍がケダー州及びコタバル地区(コタバルを除く)を担任し、攻撃開始時刻は、12 月 8 日 06:00 と定められていました。

そして、シンガポール攻撃に向かった海軍の**元山航空隊**(サイゴン、96 陸攻)が悪天候のために引き返しましたが、**美幌航空隊**(サイゴン近郊のツダウム)の 96 陸攻 34 機が 05:30 頃、テンガー、セレター両飛行場を爆撃しました。

陸軍の第一撃は**第 7 飛行団**がケダー州に対して加える予定でしたが、主要基地プノンペンが 7 日夜半の豪雨で水溜りとなり、重爆の夜間離陸は困難だとして、**山本飛行団長**は、「12:00 に飛行団統一の攻撃を行う」と命じました。しかし、**第 3 飛行集団**は、サイゴンの**飛行第 98 戦隊**(97 重爆)の即刻出動は可能であると主張します。



第 25 軍北部マレー進攻経過図[1)]

これに対して飛行団長は意見を変えず、集団長と激しく対立します。しかし、**飛行第 98 戦隊長**の**臼井茂樹大佐**は、飛行団命令が到着した時点はすでに離陸寸前であり、そのまま出動し、悪天を突いてスンゲイパタニとアロルスターの飛行場を爆撃し、全機無事に帰還しました。それにしても、集団長と団長の軋轢は異常でした。

飛行第 60 戦隊(97 重爆 27 機)は、アロルスター飛行場を爆撃しての帰途、パタニ沖で日本海軍艦艇から射撃を受け、2 機海没、1 機不時着となりました。いっぽう、**飛行第 12 戦隊**(97 重爆 24 機)はスンゲイパタニ飛行場を攻撃し、炎上 1、大破 17、中小破 6 の戦果を挙げ、全機帰還しました。また、**飛行第 64 戦隊**(隼)は、**飛行第 12・第 60 戦隊**のペナン、スンゲイパタニ方面攻撃を掩護し、1 機を撃墜するとともに、対地攻撃で 10 機炎上を報じました。

(5) コタバル方面の飛行場攻撃

第 3 飛行団は予定どおりコタバル飛行場に進出し、12 月 8 日 08:30 頃、飛行第 75 戦隊(99 双軽 28 機)がクワラペスト、飛行第 90 戦隊(99 双軽 28 機)がタナメラを攻撃しました。第 59 戦隊(隼)は両軽爆部隊を掩護し、延べ 15 機の敵と交戦しました。そして、飛行団として、6 機(うち不確実 4 機)撃墜、5 機撃破炎上の戦果を報じましたが、戦闘・司偵各 1 機を失いました。

第 10 飛行団は、主力で第 15 軍のタイ国進駐作戦に協力し、飛行第 62 戦隊(97 重)をもって 8 日早朝、タナメラ飛行場攻撃を行い、相当の戦果を報じましたが、戦隊長・波多野赳夫中佐以下、第 1 中隊の主力が未帰還となりました。

(6) 第 3 飛行集団緒戦の評価

一部に混乱があったものの、第 3 飛行集団として大局的に見ると、第 25 軍先遣兵団の上陸掩護を完遂したことは、成功であったと言えます。ただし、英空軍の基地がかなり分散しており、彼らが積極的な空中戦闘を行いませんでしたので、緒戦における北部マレー方面の航空戦力減殺については、不十分な結果に終りました。

12 月 10 日、海軍の一式陸攻と九六式陸攻が戦艦プリンス・オブ・ウェールズとレパルスを雷撃と爆撃で沈めました(マレー沖海戦)が、これは、「真珠湾のように停泊中の船ならまだしも、行動中の戦艦は航空機には撃沈できない」という世界の常識を打ち破る結果となりました。日本を除く(?)各国は大艦巨砲主義を改めて航空機の優位性に目覚め、有色人種が白色人種の新鋭軍艦を沈めたということで、東南アジア唯一の独立国・タイ以外の植民地住民が独立に目覚めたそうです。

9 比島上陸作戦[1)]

(1) 先遣支隊の飛行場占領

ルソン島上陸に先立ち、8 日 07:30、バシー海峡のバタン島に海軍陸戦隊が奇襲上陸し、米軍監視隊を撃破して 09:30 にバスコ着陸場を占領し、同行した第 24 飛行場大隊の一部が展開して、同海峡方面の船団護衛に任ずる飛行第 24 戦隊(97 戦)のための中継基地を形成しました。

いっぽう、ルソン島北岸のアパリ飛行場占領を企図する田中支隊(台湾歩兵第 2 聯隊主力基幹)は、10 日払暁に上陸を行い、その空中掩護は飛行第 50 戦隊(97 戦)が行いました。

同日は飛行第 50 戦隊の 3 機、11 日には戦隊主力の 34 機がアパリに進出しました。

ビガン方面には、菅野支隊(台湾歩兵第 2 聯隊の 1.5 個大隊基幹)が 10 日払暁に上陸し、午前中、B−17 延べ 6 機、戦闘機延べ 12 機が来襲しましたが、飛行第 24 戦隊主力がこれを撃退しました。同じく 10 日、海軍航空隊はデルカルメン、キャビテ、ニコルス等のマニラ周辺の飛行場に進攻し、撃墜、撃破各 50 機を報じました。

第 14 軍ルソン島作戦図[1)]

(2) 航空第一撃の成功

開戦当初における陸海軍航空攻撃の境界は、北緯 16 度(リンガエン東西の線)でした。この北側を担任した**第 5 飛行集団**は、**第 4 飛行団**の**飛行第 8 戦隊**の 99 双軽 25 機でツゲガラオ飛行場、**飛行第 14 戦隊の** 97 重爆 18 機でバギオの兵営、通信所の攻撃を命じました。

12 月 8 日朝の台湾中・南部は霧に包まれ、特に、海軍の**台南**、**岡山**、**高雄飛行場**は濃霧のために予定の 07:30 になっても離陸できず、離陸が延期されました。いっぽう、陸軍は、06:20 から 07:30 の間離陸可能となり、09:30 頃に上記目標の攻撃を行い、12:00 頃、全機帰還しました。

B-17 Flying Fortress
(インターネットから)

マッカーサー司令部は、09:00 以降、B－17 による哨戒飛行を行いましたが、AAF(アメリカ陸軍航空軍)の**ブレリントン司令官**の台湾爆撃の具申に対してマッカーサー将軍は、米軍の防勢的開戦をアピールするために、それを許可しませんでした。

霧が晴れ、海軍航空部隊は 10:30 から 11:00 にかけて離陸し、中攻 54 機、零戦 36 機でクラーク基地を、中攻 54 機、零戦 54 機でイバ基地を攻撃しました。これによって、撃墜 25 機、撃破については大型・中型合計で 45 機、小型 33 機、飛行場施設破壊多数と報じられました。3 機種に限って言いますと、12 月 9 日時点の使用可能機数は、定数の 43%にまで落ち込んでいたようです。B－17 の多くは活躍する前に減殺されました。

AAF の使用可能機数[1)]　(単位:機)

No.	機　種	定　数	12月8日	12月9日
1	B－17	35	30	17
2	P－35	52	18	15
3	P－40	107	72	52

開戦劈頭の航空戦第一撃の成功は、我が海軍基地航空部隊の活躍に負うところが大でした。特に、零戦の遠距離進攻能力と中攻の高高度爆撃能力は優れていました。また、陸軍航空部隊との2段攻撃も、敵を混乱させるに十分でした。

10 香港飛行場の急襲[1)]

香港攻略部隊は、**酒井隆第 23 軍司令官**指揮の**第 38 師団**(＋歩兵 3 個大隊)及び**軍飛行隊**等でした。**軍飛行隊**は、**飛行第 45 戦隊**(98 軽爆 27 機)、**独立飛行第 10 中隊**(97 戦 12 機)、**独立飛行第 18 中隊の 1 編隊**(97 司偵察 3 機)、**飛行第 44 戦隊第 3 直協飛行隊**(98 直協 6 機)等から成っていました。

12 月 8 日午前 4 時前、第 23 軍航空主任参謀は、**第 23 軍飛行隊**に対し、南方軍が 01:00 頃コタバルに上陸したことと、攻撃時刻を 08:20 とすることを伝えました。**飛行隊長・土生秀治**(はぶひでじ)**大佐**(**飛行第 45 戦隊長**兼務)は、戦爆連合部隊の第一撃を啓徳飛行場に加えるよう命じ、自らは軽爆戦隊長として空中指揮を行いました。

そして、在地 14 機中、12 機を炎上、2 機を大破させ、一挙に敵航空戦力を壊滅させました。香港は堅固な要塞となっており、その後陸海軍の大型機部隊も攻撃に参加し、これが陥落したのは、12 月 25 日でした。

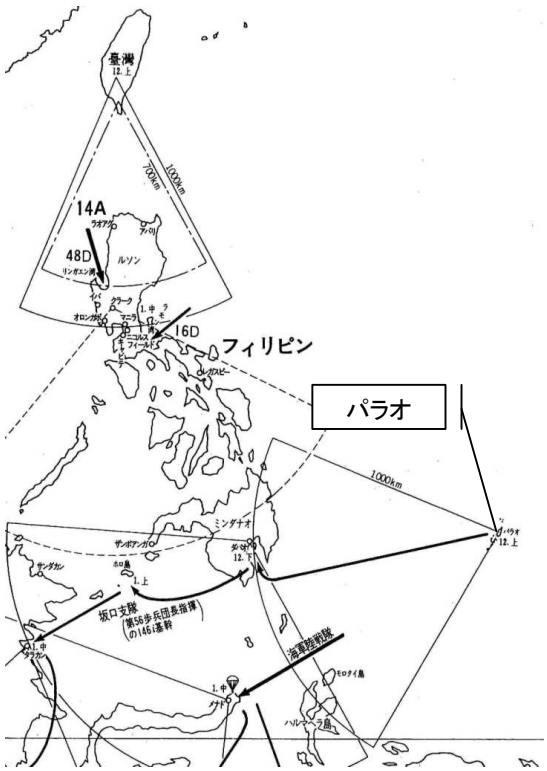
11 その他の航空第一撃[1)]

(1) ダバオ

12 月 8 日 07:46 から 07:56 にかけて、空母『龍驤(りゅうじょう)』から発進した艦上戦闘機 9 機、艦上攻撃機 13 機が、ダバオ飛行場施設と米水上機母艦を攻撃し、飛行艇を銃撃炎上させました。これは、12 月 12 日に予定されているパラオ方面からダバオ方面への上陸準備でした(次頁参照)。

(2) グァム島

12 月 8 日 06:45 にサイパンを発進した海軍第 18 航空隊の水上機 16 機が同日午後及び 9 日、グァムの上陸点付近を爆撃しました。これは、12 月 10 日の**南海支隊**(第 55 師団の歩兵 44 聯隊基幹)の上陸準備でした。米軍の飛行場は未完成でした。



比島周辺の制空圏推進経過要図[1)]

(3) ウェーク島

ウェーク島には、米軍の陸上及び水上飛行場がありました。日本領マーシャル諸島ルオット島から発進した海軍の陸攻 34 機が 1,100km を飛行して、12 月 8 日 10:10、ウェーク飛行場を急襲し、敵機全機の撃破を報じました。また、念のために 10 日までに合計 3 回の攻撃を行いました。

これで航空撃滅戦が成功したと考え、11 日に陸戦隊が上陸を開始したのですが、残存していた戦闘爆撃機の攻撃を受け、駆逐艦 2 隻が沈没して、上陸作戦が中止されました。そして、ハワイ空襲機動部隊が、その帰途に立ち寄り、その支援を受けて、12 月 23 日に上陸が達成されました。

フリー百科事典『ウィキペディア』の『ウェーク島の戦い』に、おもしろいというか哀しいというか、次のような記事がありました。占領後、陸戦隊士官が米士官に対し、飛行場の弾痕を埋めるために 300 名の作業員を要求したところ、米士官が「3 名で十分だ」と言うのです。怒った陸戦隊士官が「何日でできるのか？」と聞くと、「1 日もあれば十分だ」と言います。彼らは翌日、倉庫からブルドーザーを引き出し、半日で作業を終えました。そのほかにパワーショベルもあり、これらを見本として日本に持ち帰り、試作品を作りましたが、実用化はできなかったそうです。

(4) ミッドウェー島

ミッドウェー島に対しては、12 月 8 日、駆逐艦 2 隻で飛行場に対する艦砲射撃を行い、相当の戦果を報じました。

おわり

次回は「加藤隼戦闘隊」

＜ 参 考 文 献 ＞

1) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(2)」(昭和 49 年 11 月 防衛庁防衛研修所戦史室)
2) 「大東亜戦争の正体 それはアメリカの侵略戦争だった」(平成 18 年 2 月 清水 馨八郎(しみずけいはちろう)著 祥伝社)
3) 「大東亜戦争の真実 東條英機宣誓供述書」(平成 17 年 8 月 東條 由布子編 ワック㈱)
4) 「あゝ戦闘隊 かえらざる撃墜王」(平成 5 年 7 月 黒江 保彦著 ㈱光人社)
5) 「戦闘機「隼」」(平成 7 年 10 月 碇 義朗著 ㈱光人社)
6) 「陸軍航空隊全史」(昭和 62 年 9 月 木俣 滋郎著 ㈱朝日ソノラマ)